商業的成功と文学的成功
ゾラ『居酒屋』(1876−1877)の連載と書籍版の出版をめぐって[1]

宮川　朗子

はじめに

文学作品の成功とはどのようなことだろうか。その作品を、権威のある批評家に評価されることだろうか。万人に読まれることだろうか。良く売れた作品はそれだけで高く評価されるのだろうか。人気を博した作品は、その後も読まれ続けるのだろうか。このような問いを考える時、ピエール・ブルデューの 19 世紀末のフランス文学界に関する研究は興味深い。ブルデューは「[...] la hiérarchie entre les genres (et les auteurs) selon les critères spécifiques du jugement des pairs est à peu près exactement l'inverse de la hiérarchie selon le succès commercial.[2]　ジャンル（及び作家）の間の序列は、同業者による固有の評価基準に沿っているが、それは、商業的成功による序列とほぼ真逆である。」と、この時代に現れ始めた芸術作品の評価の二元化の傾向を指摘している。確かに、フロベールやプルーストの作品は、その文学性が何よりも評価され、今日までその魅力が探求され続けている一方で、彼らが同時代の大衆的な人気を誇った作家たちよりも文学作品から収入を得なかったことを考えると、この見解も説得力を帯びてくるように思えてくる。

しかしながら、その文学的価値を認められた作家とは、フロベールやプルーストのような独自の知的審美的世界を築きあげることにその関心が集中しているような作家ばかりではない。作品は大衆を魅了するが、同時にその魅了する力を文学的評価につなげようとする作家もいる。ゾラがまさにそのタイプであるが、とりわけ青年時代、ペンで生きるために地方紙の連載小説を引き受けた理由を、自身の文学観を織り交ぜながら、友人のアント

---

[1] 本稿において、以下の文献からの引用は、それぞれ冒頭の記号で示し、その後に巻号(ローマン数字)あるいは発行年月日とページ番号を記す。尚、鍵括弧内の語、記号、下線は引用者による。

BP : Émile Zola, *L'Assommoir,* Paris, aux bureaux de l'administration du journal *Le Bien Public,* 5 rue Coq-Héron, 1876.

CR : Émile Zola, *Correspondance,* I-X, B. H. Bakker (s.l.d.), Les Presses de l'Université de Montréal – Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1978-2011.

OC : Émile Zola, *Œuvres Complètes,* Cercle du livre précieux, I-XV, Henri Mitterand (s.l.d), 1962-1969.

RL : *La République des lettres,* revue mensuelle fondée en 1875 ; 1876-1877, hébdomadaire. 尚、この文献は、以下のサイトを参照する。
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k329712?rk=107296;4
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k32972d?rk=64378;0
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k920038c?rk=21459;2

RM : Émile Zola, *L'Assommoir,* dans Émile Zola, *Les Rougon-Macquart,* Armand Lanoux (s.l.d.), Henri Mitterand (Études, notes, variantes, glossaire et index), tome I-V, Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, 1989.

[2] Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire,* Paris, Éditions du Seuil : Libre examen, 1992, p. 165-166.（参照：ピエール・ブルデュー『芸術の規則 I』、石井洋二郎訳、藤原書店、1995年、185頁）

ニー・ヴァラブレーグに、1867 年 4 月 4 日付の手紙の中で次のように述べている。

> Il ne m'est pas permis comme à vous de m'endormir, de m'enfermer dans une tour d'ivoire, sous prétexte que la foule est sotte. J'ai besoin de la foule, je vais à elle comme je peux, je tente tous les moyens pour la dompter. En ce moment, j'ai surtout besoin de deux choses: de publicité et d'argent. (*CR I*, 485)
> 私にはあなたのように、群衆は馬鹿だと言って、安住し、象牙の塔に引きこもっていることは許されないのです。私には群衆が必要です。私は自分のできるやり方で群衆の方に向かい、あらゆる手段で彼らを手なずけるつもりです。目下、私には二つのものが必要なのです。つまり、広告と金が。

自分を売り出すための広告と金が必要であるために、三文文士と見做されかねない連載を引き受けたとのことだが、これは単に生活上の必要の問題なのではなく、なるべく多くの読者を自分の作品にかかわらせることを問題としており、それこそが、ゾラの文学の目的でもあった。

そこで本論は、ゾラが大衆を引きつけ、同時に文学的な評価を得るに至るまでに展開されたさまざまな活動を考察したい。そのために、ゾラの作品の中でもとりわけ物議を醸しだし、あらゆる方面からの批判にもかかわらず文学史上における地位を獲得させた『居酒屋』をとりあげ、この作品の商業的成功と文学的評価との関係を考えてみたい。

1.『居酒屋』連載をめぐって

『居酒屋』の連載は、共和主義的な『ビヤン・ピュブリック』*Le Bien public* 紙で、1876 年 4 月 13 日から始まった。たちまちのうちに話題となったこの小説が、右派からは猥褻、左派からは民衆を汚すとして非難されたことはよく知られている。そしてこの小説は、6 章の最後でこの新聞における連載が打ち切られてしまう。その理由として、1876 年 5 月 27 日に、ゾラはツルゲーネフに宛てた手紙の中で、新聞社が、この小説の連載を続けるなら予約購読を解約するという読者からの非難を受けたと説明している。とはいえ、これは連載の続きを掲載してくれる新聞をツルゲーネフにロシアで探してもらうためにあわててしつらえた口実にすぎず、[3] 他方では、ポール・アレクシに「*L'Assommoir* n'a pas paru assez radical et a été arrêté dans *Le Bien public.* (*CR II*, 465)『居酒屋』は、十分に急進主義的ではないように見え、それで『ビヤン・ピュブリック』紙では打ち切られたのだ。」と説明している。

この一方的な打ち切りの代償として、ゾラは、『ビヤン・ピュブリック』紙より、この小説が全て掲載された場合に支払われる金額に相当する 8,000 フランを受け取ったようだが、この新聞の系列にある雑誌『レピュブリック・デ・レットル』*La Répubique des lettres* からの、連載の続きを掲載する申し出に応じ、さらに 1,000 フランを手に入れることになる。[4]

---

[3] Voir *CR II,* p. 457. 実際ゾラは、『ビヤン・ピュブリック』紙の編集長イヴ・ギヨーから、新聞の売り上げはやや向上しているので安心するようにとの報告を受けているため、連載中止がこの理由であるとは思われない。Cf. *CR II*, p. 458.

[4] Voir *CR II*, 465.

このゾラに対する補償から考えるなら、新聞社側にとってこの小説の連載打ち切りは損失と考えられるが、これを埋め合わせる措置もとられていた。

まず、『居酒屋』連載の打ち切りは、予約購読の解約という問題ではなく、むしろゾラがこの小説の仕上げに時間をとるあまり、締め切りに遅れがちであったという事情によるようだ。実際、1876 年 5 月 28 日に『ビヤン・ピュブリック』紙は、ゾラから小説の仕上げを入念に行うために時間が欲しい旨を要請されているという記事を載せ、[5] 第 1 部、つまり 6 章の終りまでを掲載した 6 月 7 日を最後にこの小説の連載を打ち切る。さらに、『居酒屋』の発表について詳細に調査したレオン・デフーによれば、[6] 『ビヤン・ピュブリック』紙は、7 月 6 日、ゾラには小説をより練り上げるために時間が必要であるため、予定されていた次の連載、レオポルド・スタプローの小説を先に発表することになったことと、『居酒屋』の続きは『レピュブリック・デ・レットル』で発表されるという告知を掲載した。つまり、この連載の打ち切りは、読者からの批判といった外的な影響ではなく、作品の仕上げを入念にしたいという作家の意思を新聞側が認めたという形で説明されている。

ところで、各方面から非難されたとはいえ、話題作には違いない『居酒屋』の連載を打ち切ることは、この小説を楽しみにしていた読者からの予約購読の解約を招きかねない。それゆえ新聞は、その事態に対する対策も忘れない。

> Par suite d'arrangements pris avec l'administration de *La République des Lettres*, 2, rue de Châteaudun, tous nos abonnés anciens et nouveaux qui en feront la demande recevront gratuitement cette revue où sera publiée, in-extenso, à partir du 9 juillet, la deuxième partie de *L'Assommoir*.
>
> 『レピュブリック・デ・レットル』本部（シャトーダン通り2番地）との協定に基づき、既に弊紙を予約購読いただいている方も新たに予約される方も全て、お申込みいただけましたら、7月9日以降『居酒屋』第2部が全文掲載されるこの雑誌を、無料でお受け取りになれます。

さらに、7 月 10 日の『ビヤン・ピュブリック』紙には、以下の告知を出す。

> Demain la deuxième partie de *L'Assommoir* paraît dans *La République des Lettres*; voulant faire bénéficier nos acheteurs au numéro de cette prime, nous joignons à chaque exemplaire un bon relié à la date du journal. Sept numéros donnent droit à un exemplaire de *La République des Lettres*.[7]
>
> 明日、『居酒屋』第二部が『レピュブリック・デ・レットル』にて発表されます。この特典が掲載された号をお望みの、弊紙を予約以外でお買い求めいただいておりますご購読者さまのために、新聞の日付の部分に引換券をお付けします。7号分で『レピュブリック・デ・レットル』1部をお受け取りになれます。

---

[5] Henri Mitterand, « L'Étude » (*L'Assommoir*) in *RM II,* p.1558.

[6] Léon Deffoux, *La Publication de* L'Assommoir, Société Française d'Éditions Littéraires et Techniques, 1931, p. 51-52.

[7] *Ibid.*

このような購読者へのプレゼントは、新聞社にとっての不利益を回避するための措置であると同時に、この話題作が常に同系列の雑誌において連載中であることの宣伝でもあるのだが、この告知からは、この小説をいわば撒き餌として、『ビヤン・ピュブリック』紙を買わせようとする意図も窺えるだろう。

ところで、売り上げを伸ばすための宣伝という役割の他に、この時代の連載小説に課されたもう一つの外的な課題として、出版に立ちはだかる検閲の通過がある。ゾラは既に、『居酒屋』発表より 8 年前の 1871 年に『クロッシュ』*La Cloche* 紙に発表された『獲物の奪い合い』*La Curée* が、風俗壊乱の廉で連載中止となる憂き目を見ている。作家にこのような「前科」があり、かつ当初よりポルノだという非難を受けていた『居酒屋』に、検閲の目が厳しくなることは想像に難くなく、実際、『ビヤン・ピュブリック』紙では、露骨と思われる表現に、書き換えや削除が施されている。具体的なこれらの変更点については後ほど詳しく検証するが、新聞は、いわば自主検閲によって、公的な検閲を潜り抜け、連載が引き起こしかねない新聞の発売禁止処分を回避しようとする。

また、検閲は、一般的により多数の目に触れる新聞に対して最も厳しいが、雑誌や書籍も当然この制度から免れ得ない。事実、『ビヤン・ピュブリック』紙の連載を引き継いだ文芸誌『レピュブリック・デ・レットル』は、検事の訪問に警戒心を強めた印刷所から、雑誌の印刷を拒否する意向を示されるという問題に直面する。11 月 5 日の号に『居酒屋』の連載を欠いたのは、この理由によるようだが、[8] その後、滞りなく最後まで連載が続いたことから、発売禁止は何らかの方法で回避されたと考えられるだろう。

多くの人々の興味を引きつけることと検閲を通過することの両立は、ゾラの場合、とりわけ難しい課題であったといえよう。

2. 書籍版『居酒屋』の出版の驚異

連載をめぐっては、上述のような問題があるゆえに、ゾラは、自分の小説が連載後に書籍化される際、かなりの修正を施している。書籍版が、連載版よりも文学的作品に適していると考えていることは、1876 年 5 月 24 日にリュドヴィック・アレヴィに宛てた手紙から窺える。

> Je n'ai qu'un regret, c'est d'apprendre que vous lisez *L'Assommoir* en feuilleton. Vous ne sauriez croire combien je trouve mon roman laid sous cette forme. On me coupe tous mes effets, on m'éreinte ma prose en enlevant des phrases et en pratiquant des alinéas. Enfin, j'ai le cœur si navré par ce genre de publication, que je ne revois pas même les épreuves. Si j'osais, avant de publier en feuilleton, je mettrais une annonce ainsi conçue: « Mes amis littéraires sont priés d'attendre le volume pour lire cette œuvre » (*CR II*, 456)
>
> ひとつだけ残念なことがあります。それはあなたが『居酒屋』を連載でお読みになったことです。私の小説があの形式で発表されるとどんなに醜いか、あなたにおわかりいただけないのではと危惧しております。私が生み出す効果を全てカットしてしま

[8] Cf. Henri Mitterand, *op. cit.* p. 1560.

うし、いくつもの文を削除したり、何回も改行して、私の文体を台無しにしてしまうのです。とにかく、私はこの手の出版物にあまりにも落胆させられているので、校正刷りすら見直さないのです。連載開始前に思い切ったことができるなら、「私の文学を愛する方々は、どうぞ書籍版の刊行を待ってからこの作品をお読みください」という告知を出すでしょう。

このように、ゾラは、書籍こそ文学的な作品にふさわしい発表形式であると考えていたようだが、書籍も売られるものである以上、やはり商業主義的な操作を免れることはできない。この点に関する考え方も気になるところだが、実際、ゾラは、自分の本を売ることにはやぶさかでないどころか実に熱心であり、人の関心を引き付けそうな発表方法を提案さえした。ゾラが最も得意としたのは、自分の小説に対する批判に答えながら、論争を激化させ、話題作にしてしまう方法である。[9] それゆえ『居酒屋』が、連載時からさまざまな批判を浴びたことは、むしろ喜ぶべきことで、とりわけ『フィガロ』*Le Figaro* 紙上で、激しくかわされたアルベール・ミヨーとの論争の後、[10] ゾラは『レピュブリック・デ・レットル』の編集長カチュール・マンデスに宛てた1876年9月9日付の手紙の中で「Les injures du *Figaro* ont-elles produit quelque effet? (*CR II,* 488)『フィガロ』紙での罵り合いは、何らかの効果を生んだのだろうか？」とその宣伝効果を気にする様子を見せている。

この論争が功を奏したかどうかは不詳であるものの、『居酒屋』が当時驚くべき売れ行きを伸ばしたことは事実である。『エミール・ゾラ事典』*Dictionnaire d'Émile Zola* の「tirages 発行部数」の項目に、1877年から1928年までのゾラの主要作品の発行部数を記録した表が挿入されているが、この1877年こそ『居酒屋』刊行の年で、この小説は、この1年で38版が出されている。『居酒屋』書籍版刊行以前の小説が、この小説より販売期間は長かったにもかかわらず、1877年時点において6、7版にとどまっていたことを考えるなら、この小説がいかに驚異的な人気を誇ったか窺い知ることができる。

とはいえ、書籍の再販については注意が必要である。本は売れ行きが良ければ再版されるが、この仕組みを利用した宣伝方法もあるからだ。マリー＝エヴ・テランティは、この時代、本を売るために最も安上がりで効果的な方法として、再版作戦とも名づけられそう

---

[9] ゾラがデビュー当時、不利な条件を自ら申し出ながらも自作の売込みに奔走していたことは、Jean-Yves Mollier, *L'Argent et les lettres Histoire du capitalisme d'édition 1880-1920,* Fayard, 1988, pp. 213-234. に言及がある。また、この作家がいわば「炎上商法」のような自作の売り方を発案、あるいは実践しようとしていたことは、石橋正孝、倉方健作『あらゆる文士は娼婦である　19世紀フランスの出版人と作家たち』、白水社、2016年の第2章でも紹介されている。

[10] この批評も、新聞の広告としての連載小説の役割を考えると興味深い。アンリ・ミトランは、1876年10月12日の『フィガロ』*Figaro*紙補遺版で発表された『居酒屋』の書評において、作品からの多くの抜粋が掲載されたことに対し、ゾラとこの小説の掲載について独占契約を結んでいた『ビヤン・ピュブリック』の編集長のイヴ・ギヨーが激怒したことを紹介している (Henri Mitterand, *op. cit*, p.1559) が、その前に発表された、このアルベール・ミヨーの批評（1876年9月1日、7日）もこの小説からのかなりの直接引用を含んでいる (Cf. *Figaro,* 1er septembre 1876, p.1-2; 7 septembre 1876, p.2)。他紙の話題作をふんだんな引用とともにとりいれた批評も、新聞の広告機能を間接的に担っていることになるだろう。

な出版社の実践を紹介している。[11] それは、出版された本はすべて登録される『フランス書誌』*Bibliographie de la France* を利用するものだが、この書誌は、同じ作品であっても、版が異なれば再度掲載されるため、版を重ねた本は、人の目に何度もタイトルがふれることになり、売れているという印象を与えることができる。そこで、出版社は、一回の版の部数を極力少なくし、本を売り切り、再版するのだが、そもそも最初から大量に印刷していたとしても、「初版」の文字を入れる部数を少なくし、それらを売り終えた時点で「第 2 版」の文字を入れた本を売ることもあったようだ。テランティは、「第 2 版」を 4 部だけ作り、完売させたウジェニー・フォアの『醜女』*La Laide* の例や、1,500 部作成される『モーパン嬢』*Mademoioselle Maupin* が二つに分けられ、それぞれ第 2 版と第 3 版の文字が入れられることが明記されたテオフィル・ゴーチエの契約書の例を紹介しているが、それゆえ、短期間のうちに数十版を重ねる本が続出しても不思議ではない。

このような実践を考慮すると、1 年で 38 版という『居酒屋』の再版数にも疑いの目を向けたくなる。事実、『居酒屋』の二作後に出され、この小説以上の話題をさらった『ナナ』*Nana* が収録された、プレイアッド版の「Études 解説」中の「Les éditions suivantes 再版」にある「Charpentier publia d'un coup les cinquante premières éditions.[12] シャルパンチエは一気に最初の 50 版を刊行した。」という説明に注目するなら、似たような操作がゾラの作品についても行われていたことが想像される。

それでは『ナナ』同様シャルパンチエで出版された『居酒屋』について、テランティが挙げたような類の再版作戦が行われていただろうか。先に挙げたレオン・デフーの研究によれば、[13] 1881 年末に、この小説の売り上げは 10 万部に達したとのことだが、フランス国立図書館のカタログ中、この年に出版された『居酒屋』として、87 版が記録されているため、[14] この数字で単純に 1 版あたりを計算したとしても 1,149 部となる。87 版がこの年の最後にでた版ではないことも考えられるため、別の計算を試みるなら、上述の表にある 1880 年に 83 版を重ねたとの記録から、一年あたりに換算するなら、この小説は発表から 4 年の間で、一年あたり約 20 版ずつを重ねてきた計算になるゆえ、この割合で考えて、1881 年末には 100 版から 105 版に達すると想定するとしても、1 版あたり 952 から 1,000 部となるので、ウジェニー・フォアの例のような極端な操作が行われていたとは考えにくい。[15] ちなみに、一気に 50 版を刊行したという『ナナ』は、最初に 55,000 部売り出したとの記録もあ

---

[11] Cf. Marie-Ève Thérenty, *Mosaïques Être écrivain entre presse et roman (1829-1836),* Champion, 2003, p. 106.

[12] Henri Mitterand, « L'Étude » (*Nana*), in *RM II,* p. 1656.

[13] Léon Deffoux, *op. cit.* p.68.

[14] Cf. http://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb359639002

[15] 十万部という数字は、今日の感覚ではそれほど多くないように思われるが、当時、書籍は、買われるより借りられる方がはるかに多かった。販売部数からは、貸本屋の記録や家族や仲間内での回し読みを行った読者数を推測することは不可能であるため、この数字は『居酒屋』の反響の一つの指標として挙げておく。また、ゾラの他の作品と比べるなら、それらの販売状況は、先に挙げた『獲物の奪い合い』(1871, 連載は中断されたが、書籍は売られている) は、1880年には21版、28,000部に、その次の『パリの胃袋』*Le Ventre de Paris* (1873) は、同年17版22,000部であるので、これらと比べても、『居酒屋』の売れ行きの驚異は推し量られるだろう。

り[16]、たとえ同時に刷られたとしても、一版あたり、1,100 部になるゆえ、この小説についても、一版あたりの部数は平均的といえる。

以上のことから、『居酒屋』の売り上げの驚異は現実であったといえるが、当時の出版業界の慣行によって珍しくなくなった、何十版という数字を表紙に掲げた本、往々にして大衆的と見做される本と『居酒屋』は、混同される危険はあっただろう。ゾラがソルボンヌに入るためには 50 年かかったとは、ゾラ研究のはじまりを語る際によく引き合いに出される言葉であり、この作家が文学の研究対象として認められるまでにかかった時間の長さを物語る言葉であるが、このような現象が、ゾラ及び『居酒屋』が正統な文学の伝統に位置するものとして認知されるためには支障ともなったのかもしれない。

3. 話題作を正統的な文学として認知させるために

前章で、ゾラが連載という形式を嫌い、自分の文学の愛好者には、書籍版で読んでほしいと願っていた手紙を引用したが、『居酒屋』の連載版と書籍版を比較検討する前に、当時ゾラが置かれていた状況を考えておく必要がある。というのも、量的に見るなら、書籍版において加筆修正された部分は、それまで発表した他の小説と比べてとびぬけて多いわけでもないにもかかわらず、先に引用したアレヴィに宛てた手紙にみられるように、とりわけこの小説に関して、ゾラは連載版との違いを強調するようになっているからだ。確かに、ゾラの連載に対する態度は両義的で、1860 年代に、連載を主たる発表の場とする大衆小説家たちについて好意的な批評をよせていたことすらあったものの、[17] 並行して、デビュー当初より、連載という形式は自分の作品を発表するにはそぐわないとしていた。[18] そして、『居酒屋』発表前後に、連載小説家に対して厳しくなり、並行して自然主義の理論を錬成したのは、ダニエル・コンペールが指摘するように、[19] ゾラが連載発表後に廉価版を刊行するという当時の大衆小説家たちと同じ発表の段階を踏んでいたため、彼らとの差異化を図ったという意図によるかもしれない。さらに、連載あるいは書籍の成功の後に、挿絵本の出版や、演劇への翻案、そして演劇化に伴うさまざまなテクストの出版へというパターン[20]も彼らと同様であることを考慮するならば、コンペールの指摘はより説得力を帯びてくる。つまりゾラが連載版と書籍版との違いを強調するのは、後者を、より文学的な質を向上させたものとして世に出すという意図によるものと考えられよう。

ただ、このような背景だけではこの問題の説明としては不十分だろう。そこで、連載版と書籍版を比較してみたい。ゾラが連載版にかなりの修正を施してから書籍版として発表していたことや、その形跡が初期から見られることを、われわれはこれまで、『テレーズ・

---

[16] Henri Mitterand, « L'Étude » (*Nana*), in *RM II,* p. 1692.

[17] 例えば、1866年5月1日に『エヴェヌマン』*L'Événement*紙に発表したポール・フェヴァルに対する批評や同紙の1866年5月12日に発表したジュール・ヴェルヌに対する批評。Voir *OC X*, p. 466, 477-478.

[18] Voir Lettre à Arsène Houssasye, 12 février 1867. In *CR I*, p. 470-471.

[19] Daniel Compère, *Les Romans populaires,* Presses Sorbonne Nouvelle, 2011, p.119.

[20] 『居酒屋』の場合、書籍版刊行の1年後の1878年には挿絵版が、1879年には演劇化され、そのテクストも1881年に出版されている。

ラカン』、『ルーゴン家の運命』、『プラッサン征服』を例にとって検証し、書籍版においては、連載版よりも非論理性を排する傾向や、ある種の審美的な配慮が認められることを指摘してきた。[21]『居酒屋』についても同様の検証をしてみたいが、この小説の場合、初版の入手が非常に困難という難点がある。[22] また先に指摘したように、版の数字は異なっていても、初版と同時に刷られた版もあることは、考えられるとはいえ、どの版までを実質的な初版と見做すべきかという判断も難しい。また、『居酒屋』については、ゾラが書籍版になってからも修正を繰り返していたという事実があるが、プレイアッド版のヴァリアントを参照するなら、初版からいわゆる決定稿[23]への異同は少なく、かつ数行に及ぶものはない。かつ、この二版の異同の傾向は、連載版と決定稿との異同の傾向から外れるものも見当たらない。ゆえにここでは、この二つの版の差異は重視せず、それらよりも大幅な変更が見られる連載版と決定稿との差を見てみることとする。

最初に連載が掲載された『ビヤン・ピュブリック』紙掲載の版[24]と決定稿とを比べて一見してわかることは、連載版における改行の多さである。第 1 部とされるこの新聞に掲載された部分においては、決定稿と比べ、90 以上も段落が多い。頻繁に改行して短い段落で小説を展開させることをゾラが嫌うことは、先に挙げたアレヴィへの手紙の中でも言及されているが、その十年前の 1866 年 9 月 11 日『サリュ・ピュブリック』*Le Salut public* 紙に掲載された文芸時評においても、連載小説の段落の短さは揶揄されており、[25] これを連載小説特有の特徴と考えていたと思われる。とはいえ、これまでわれわれが検証してきた小説においては、書籍版の出版の際にゾラ自身が増やした段落もあったのだが、『居酒屋』においては、そのような操作はほとんど見られない。さらに、文芸雑誌である『レピュブリック・デ・レットル』*La République des lettres* での発表以降、段落は、決定稿とほぼ同様の部分で区切られているが、同じく文芸雑誌に掲載された『テレーズ・ラカン』の例も加味するなら、[26] 段落の多さはとりわけ新聞連載に顕著な特徴として考えられるかもしれない。

また、興味深い変更点として挙げられるのが、削除と加筆の関係である。これまでわれわれが検証してきた小説では、連載のほうが冗長気味であり、書籍版は、連載版から多くの文を削除することによって仕上げられたともいえるほどであった。そして、確かに、『居

---

[21] Cf. 宮川朗子「媒体と文体　―ゾラ『恋愛結婚*Un mariage d'amour*』(1867) と『テレーズ・ラカン*Thérèse Raquin*』第二版 (1868) からの考察―」、『表現技術研究』、第10号、2015年、21-52頁。宮川朗子「小説の技　―ゾラ『プラッサン征服』の連載版と初版から―」、『広島大学大学院文学研究科論集』、第74巻、2014年、15-31頁。宮川朗子「連載から書籍へ　―連載版『ルーゴン家の運命』(1870-1871) の校正からの考察―」、『広島大学フランス文学研究会』、no. 33、2014年、12-25頁。

[22] フランス国立図書館のカタログでも、最も古い版は第3版である。
Voir http://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb31690620p

[23] *RM II*に収められた『居酒屋』は、ゾラが最後に手を入れた原稿で、決定稿とされている版を採用している。本稿では、これを決定稿と見做す。

[24] この新聞に連載された『居酒屋』第1部は、1876年に『ビヤン・ピュブリック』紙によってまとめられ、製本されたが、売り出されはしなかったようだ (cf. Henri Mitterand, « L'étude » (*Assommoir, op. cit.* p. 1534.)。われわれは新聞の連載とこの第1部のみの書籍版は同一のものと考え、この版 (*BP*) を連載版として参照する。

[25] Voir *OC X*, p.617.

[26] Cf. 宮川朗子「媒体と文体」、前掲論文。

酒屋』の連載版からの削除にも、同じ傾向が認められる。例えば、ジェルヴェーズがヴィルジニーのピアスをもぎ取って、耳を割いた後の次の一節が削除されている。

> Virginie eut une plainte sourde, se baissa, la [=l'oreille] serra aux cuisses, lui mangea les genoux à travers sa jupe. Mais Gervaise la tenait de nouveau par la queue de son chignon, elle l'attirait à elle, enfonçait sa bouche dans ses cheveux, lui mordait le crâne. Toutes deux par terre, se dévoraient, avec des grognements. (*BP*, 14)

お互いに噛みつきあう激しい場面であるとはいえ、長い喧嘩の描写の中で、この場面だけが削除された理由は分かりにくい。ただ、「Tout d'un coup, Virginie se redressa sur les genoux. 突然、ヴィルジニーは膝立ちになった。」(*BP*, 14 ; *RM II*, 399)において、 ジェルヴェーズに向かって罵るという次の展開への移行の唐突さが多少は解消されていると言えるかもしれない。

削除が顕著に認められるもう一つの例は、民衆の風俗が窺えるジェルヴェーズの誕生日の晩餐の場面である。この長い場面の中で、晩餐の詳しい席順 (cf. *RL,* 16 juillet 1876, 33) が削除され、ボッシュが歌う「*Le Volcan d'amour ou le Troupier séduisant* 『恋の火山または魅力的な兵隊さん』」(cf. *RL,* 23 juillet 1876, 67) は四行紹介されていたが、書籍版では一行だけ残される。そしてメインディッシュのがちょうが運ばれてきた時の、次の会話も削除される。

- J'aime mieux la [=l'oie] recevoir dans la bouche que sur la tête, fit remarquer madame Putois.
  Mais Coupeau en lâcha une plus raide.
- Moi, c'est comme ça que je préfère les oies et les femmes, grosses et chaudes.

(*RL*, 16 juillet 1876, 36)

確かに、最後のクーポーのセリフは、この人物の女性の肉体的な好みを言ったという意味では、猥褻感が漂っているとはいえるが、例えば、10 章で、ナナの将来を話し合っている場面で、ロリユの造花女工はみな尻軽だという差別的発言に対し、未亡人で造花女工のレラ夫人が「Vous savez, je ne suis pas une chienne, je ne me mets pas les pattes en l'air, quand on siffle! あのね、私は雌犬なんかじゃない。口笛を合図に仰向けに転がるようなことはしないわよ。」(*RL*, 24 septembre 1876, 301 ; *RM II*, 681) と言い返すくだりが連載版でも書籍版でも残されていることを考えるとき、削除する積極的な意義は見出しにくいだろう。ただ、喧嘩の場面も、ジェルヴェーズの誕生日の場面も、長い描写を伴うエピソードであるため、これらの部分を削除することによって、物語の展開はやや早められるとは言えよう。

連載版に際して削除あるいは大幅に縮小されて書き換えられた部分はほかにもある。例えば、ランチエがジェルヴェーズとヴィルジニーを天秤にかけているくだりが挙げられる。この点について、連載版では、

Lui, régnant sur la blonde et sur la brune, avec une tranquillité de pacha, semblait se reposer dans son triomphe. Parfois, il laissait échapper un sourire, comme pour se féliciter de la façon roublarde dont il avait conduit sa barque. Ce n'était pas un petit tour du force, d'avoir gardé sa chambre, après le débâcle des Coupeau, et de s'être arrangé de manière à trouver tout de suite une autre table servie.

(*RL*, 24 septembre, 1876, 298)

と、ランチエの態度についてかなり詳しい説明があるが、決定稿でこの部分は、

Lui, régnant sur la blonde et sur la brune, avec une tranquillité de pacha, s'engraissait de sa roublardise. (*RM II*, 677)

という程度にとどめられている。また、

Il venait de manger une blanchisseuse; à présent, il croquait une épicière; et s'il s'établissait à la file des mercières, des papetières, des modistes, il était de mâchoires assez larges pour les avaler les unes après les autres, en quelques bouchées. Sans doute, la rue avait fini par s'habituer, ce train-train paraissait naturel, même il devait y avoir de ce sentiments dans l'indifférence de Gervaise, car le jour où Virginie lui avait pris sa boutique, il était déjà sous-entendu que Lantier passait avec. (*RL*, 19 novembre, 1876, 186-187)

と長々と説明されていたが、決定稿においては、上の引用の 3 行目の、les unes après les autres 以下が削除されている (voir *RM II,* 730)。

これらの削除された部分は、ランチエの行動に対する説明であり、語り手がこのように人物の行動や心理に踏み込んで解説するような部分を削除する傾向は、これまで検討してきた小説にも見られるが、この削除によって、ランチエの意図やこの人物に対する住民の見方はより曖昧になり、同時に、ランチエが二人を両天秤にかけている状態から、次第にヴィルジニーへ移行するという変化の方がより前景にくる。

『居酒屋』の場合、削除の例よりも興味深いのが加筆の例である。

a. Elle a couché avec tout le restaurant.
[...]
[...] avec tout le restaurant! (*RM II*, 382)

b. Salope! salope! salope! hurla Gervaise. (*RM II*, 396)

c. Ça te calmera <u>le derrière</u>. (*RM II*, 397)

a. は、ランチエの浮気相手アデルについて、ジェルヴェーズがランチエに言った悪口の加筆である。また b. は全体が加筆修正され、c. は、下線部が加筆された部分である。b. と c. は共に、ジェルヴェーズとヴィルジニーのつかみ合いの喧嘩の場面でのジェルヴェーズの言葉だが、連載版では、b.「Gervaise hurla　ジェルヴェーズは叫んだ」(*BP*, 13)、c.「Ça te

calmera.これで落ち着くだろうよ」(*BP*, 13) にとどまっているのに対し、決定稿では、b. に相手を罵る言葉が入り、c. には「尻」という言葉を入れ、単に「落ち着かせる」という意味から性的欲求を抑えろという侮蔑的な言葉に変化させている。

この三つの例は、いずれも女性の登場人物が口にした言葉であるが、決定稿で加筆された部分は、確かに女性の登場人物にかかわる言動が多い。

d. Alors, à chaque pièce, cette grande vaurienne lâcha un mot cru, une saleté; elle étalait les misères des clients, [...] qui lui passaient par les mains. Augustine, faisant celle qui ne comprend pas, ouvrait de grandes oreilles de petite filles vicieuse. (*RM II,* 507)

e. Elle avait tout de même de sacrés ailerons, cette dessalée de Clémence! Elle pouvait se montrer pour deux sous et laisser tâter, personne ne regretterait son argent. (*RM II,* 512)

f. Alors, elle était toujours dans les chemises d'homme? Mais oui, elle vivait là-dedans. Ah! Dieu de Dieu! elle les connaissait joliment, elle savait comment c'était fait. Il lui en avait passé par les mains, et des centaines et des centaines! Tous les blonds et tous les bruns du quartier portaient de son ouvrage sur le corps. (*RM II,* 512)

g. Il faut dire aussi que ces hommes sont d'une bête, quand ils couchent avec une femme; ils vous découvrent toute la nuit... (*RM II,* 546)

h. Un jour, Gervaise qui lui reprochait sa vie crûment, et lui demandait si elle donnait dans les pantalons rouges, pour rentrer cassée à ce point, exécuta enfin sa menace en lui secouant sa main mouillée sur le corps. La petite〈Nana〉, furieuse, se roula dans le drap, en criant

[...]

- Oui, je ne t'en ai jamais parlé, parce que ça ne me regardait pas; mais tu ne te gênais guère, je t'ai vue assez souvent te promener en chemise, en bas, quand papa ronflait... Ça ne te plaît plus maintenant, mais ça plaît aux autres. Fiche-moi la paix, fallait pas me donner l'exemple! (*RM II,* 744. 尚、一重鍵括弧内は連載版における記述)

d. の引用においては、下線部が書籍版で加筆された部分である。ここに「露骨な言葉」の意味を一層明確にするかのように「猥褻な言葉」を加え、さらに、年端もいかない少女でありながら、性的に放縦な環境に染まっているオーギュスティーヌの描写を加えている。また、e. から g. までは、奔放なクレマンスの身体描写や彼女の言動を具体的に示す描写やせりふの加筆、h. もまた下線部が加筆部分にあたるが、これらはジェルヴェーズが放蕩な娘ナナを叱りつけ、それに対して娘が母親の不倫を責めるせりふである。

さらに、女性同士の以下のような長いおしゃべりも加筆される。

i. - Vous croyait ça vous, qu'elle a déchroché un enfant?
reprit Clémence.
- Dame! le bruit a couru dans le quartier, répondit Virginie. Vous comprenez, je n'y était

pas... C'est dans le métier, d'ailleurs. Toutes en décrochent.

- Ah bien! dit Mme Putois, on est trop bête de se confier à elles. Merci, pour se faire estropier!... Voyez-vous, il y a un moyen souverain. Toute les soirs on avale un verre d'eau bénite en se traçant sur le ventre trois signes de croix avec le pouce. Ça s'en va comme un vent. »

Maman Coupeau, qu'on croyait endormie, hocha la tête pour protester. Elle connaissait un autre moyen, infaillibre celui-là. Il fallait manger un œuf dur toutes les deux heures et s'appliquer des feuilles d'épinard sur les reins. Les quatre autres femmes restèrent graves.

[...]

Cependant, maman Coupeau, madame Putois et Clémence discutaient l'efficacité des œufs durs et des feuilles d'épinard. (*RM II*, 547)

このくだりは、ジェルヴェーズの店に集まった女たちが、近所の産婆が堕胎に手を貸したといううわさ話から、迷信めいた堕胎方法を語り合う場面である。このエピソードは、信ぴょう性が薄い情報であるとはいえ、いかなる堕胎も禁じられていた当時の状況を考慮するなら、法に抵触しうる言説を新聞に掲載することが差し控えられたことは想像に難くない。

『居酒屋』の決定稿では、このように、とりわけ女性の言動や身体描写、風俗に関する言説が加筆されているが、この傾向は、修正の例の中にも同様に認められる。例えば、ヴィルジニーがジェルヴェーズに最初に浴びせる罵り言葉「Quoi!　なんだって！」(*BP*, 12) は、長いこと男性に縁のない女性を揶揄する言葉でもある「Chameau va!　鬼婆だね、まったく！」(*RM II*, 395) に変えられる。また、酔って妻に暴力を振るうビジャールのせりふ「Ah! coquine!... Ah! coquine!... Ah! coquine!...　このあばずれめ！…このあばずれめ！…このあばずれめ！…」(*BP*, 85) は、意味は同じではあるとはいえ、より女性の身持ちの悪さを非難する « Ah! garce!... Ah! garce!... Ah! garce!... » (*RM II,* 556) に変えられている。

また、露骨な描写の書き換えの例としては、仕事場の暑さに服を緩め、あらわな肌を見せるクレマンスの様子が挙げられる。

Clémence, appuyée fortement sur l'établi, les poignets retournés, les coudes en l'air et écartés, pliait le cou, dans un effort. (*BP*, 65)

と描かれているが、決定稿では以下の部分が続く。

j. et toute sa chair nue avait un gonflement, ses épaules remontaient avec le jeu lent des muscles mettant des battements sous la peau fine, la gorge s'enflait, moite de sueur, dans l'ombre rose de la chemise béante. (*RM II*, 513)

このように、クレマンスの身体描写の詳細な描写が加えられる。さらに、この直後のクーポーのいたずらは、連載版においては、

Coupeau continua à plaisanter. (*BP*, 65)

と、「からかって」いるにとどまっているのに対し、決定稿では、

k. Alors, il envoya les mains, il voulut toucher. (*RM II*, 513)

となり、クーポーの猥褻行為の意図を明確にしている。

ところで、これらの書籍版における加筆は、この段階においてはじめて加えられたものではない。これらの加筆と修正部分は、草稿の欠如のために確認ができない h. を除いてすべて、連載版以前の草稿ですでに書かれていたものである。[27] ゆえに、決定稿のほとんどは、連載版のために削除、あるいは修正された部分を回復したに過ぎないと考えられる。

もう一点強調しておきたいことは、先に挙げた修正部分である。自作を発表することには並々ならぬ熱意を注ぐが、検閲の問題の重大さも理解していたゾラは、発表するためにある程度の削除を容認していたが、他人の手によって異なる文が挿入されることを嫌い、それだけは避けるよう懇願していた。[28] 実際、われわれが『テレーズ・ラカン』、『ルーゴン家の運命』、『プラッサン征服』を検証していく中で、連載版において、草稿から削除された部分は多くは見られたものの、連載に際し、異なる文に書き換えられたり、草稿にない文章が加えられたケースはあまり認められなかった。しかしながら、『居酒屋』においては、修正を施された箇所が先に挙げた例の他にも認められるほどである。この時、ゾラが、『居酒屋』の連載版を自分の作品として読まれることを嫌った理由が分かるだろう。連載版は、効果を生む描写やエピソードを削除したばかりでなく、効果を減ずる書き換えが施されたために、もはや、自分の作品とは言いたくない代物に変わっていたのである。

事実、『居酒屋』の連載版に欠除、というよりは、草稿から削除された部分は、この物語の展開に関係する部分ではないとはいえ、この物語の世界の独自性を構成する要素 ―生き生きとした庶民の風俗の描写、生理学的見地から身体を捉えること、ある種の審美性を感じさせる庶民の言葉遣いなど― でもある。その評価は、『居酒屋』の書籍版を読んだマラルメが、その感動をゾラに伝えた以下の手紙にも認められる。

> Je viens de relire d'un trait *L'Assommoir* qui me manquait chaque dimanche en recevant *La République des Lettres*, depuis quelques [*sic*] temps. L'impression causée par chacun des morceaux était profonde; combien plus l'est celle du livre entier! [...]
>
> Voilà une bien grande œuvre; et digne d'une époque où la vérité devient la forme populaire de la beauté! Ceux qui vous accusent de n'avoir pas écrit pour le peuple se trompent dans un sens, autant que ceux qui regrettent un idéal ancien; vous en avez trouvé un qui est moderne, c'est tout. La fin sombre du livre et votre admirable tentative linguistique, grâce à laquelle tant

---

[27] 『居酒屋』の草稿は以下のサイトで閲覧した。
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53009326z/f13.image.r=l'assommoir%20Zola
また、a. からk. までの引用は、このサイトの下方にポップアップで現れる画像番号 (vue) で記すと、以下の通りになる。
a. 31, b. 63, c. 65, d. 327, e. 337, f. 339, g. 417, i. 419-421, j. 339- 341, k. 341

[28] 例えば以下の手紙にある。
Lettre à Charles Coligny, 25 septembre 1867. In *CR,* I, *op. cit*, p. 525.

de modes d'expression souvent ineptes forgés par de pauvres diables prennent la valeur des plus belles formules littéraires puisqu'ils arrivent à nous faire sourire ou presque pleurer, nous lettrés! cela m'émeut au dernier point. [...] La simplicité si prodigieusement sincère des descriptions de Coupeau travaillant ou de l'atelier de la femme me tiennent sous un charme que n'arrivent point à me faire oublier les tristesses finales: c'est quelque chose d'absolument nouveau dont vous avez doté la littérature, que ces pages si tranquilles qui se tournent comme les jours d'une vie.[29]

一気に『居酒屋』を読んだところです。『レピュブリック・デ・レットル』を毎週日曜日に受け取っていたのですが、少し前から連載がなくなったので寂しく思っておりました。連載の回ごとにわき起こった印象は深いものがありましたが、本全体から受ける印象はどれほどそれを上回っていることでしょう！[...]

これこそが偉大な作品というものです。それに、真理が美の大衆的な形をとる時代にふさわしいものです！庶民のために書かなかったと言ってあなたを責める人々は、ある意味誤っているのですが、古き時代の理想がないという人々も同じくらい誤っているのです。あなたは理想を見つけたのですが、それは近代的なものだ、というだけのことです。この本の陰鬱な結末とあなたの素晴らしい言語的な試み、この試みのおかげで、つまらない人間がひねりだす大抵はくだらないあの多くの表現方法が、文学の最も美しい言い回しが持つ価値を帯びるのです。というのも、これらの表現方法は、微笑ませ、あるいはほとんど泣かせてしまうからです、われわれ文人を、ですよ！このことは私を心底感動させます。[...] 働くクーポーや女性の仕事場の描写の驚くほど誠実な簡素さは、私を魅了し続けているので、結末の悲しさを忘れることができないほどです。ひとつの人生の日々のごとくめくられるあのように淡々としたページこそ、あなたが文学に与えた、何か全く新しいものなのです。

連載版では得られない感動を書籍版から得られたことが明言されているのみならず、美の大衆的な形を見出したこと、新しさ、言語的な実験といった、今日のゾラの文学的評価に相当するものを、マラルメは全て認めている。というよりも、しばしば引用されるこの手紙が、この小説の文学的価値を高めるのに貢献したと言った方が適切かもしれない。連載版を手直しし、自らの文学的価値に見合う作品とすることのみならず、自分の文学を高く評価してくれる、永劫の名声を得る可能性のある文学者の手に生まれ変わった作品を渡す—こうして『居酒屋』は、話題作から名作として認められるに至った。

おわりに

『居酒屋』の決定稿において、初校の段階で存在していたが連載版で削除、修正された箇所をほとんど回復させていることを見る時、この小説が、書籍版となって初めて文学的に価値ある作品となったわけではないことがわかるだろう。作品の発表にはさまざまな制約が課されるため、時に作家にとっては不本意な操作がなされる場合もある。そういった操作に自作をゆだねたままにしておかなかったことが、ゾラの慧眼であるともいえよう。

[29] Stéphane Mallarmé, Lettre à Émile Zola daté du 3 février 1877 dans Stéphane Mallarmé, *Correspondance II 1871-1885,* Gallimard : nrf, 1965, p.146.

価値ある作品は、言うまでもなく、名作として残る必須の条件であるが、作品の発表方法や売られ方、驚異的な販売実績を示す数字などが返って仇となり、名作であることが忘れ去られてしまう場合もある。ゾラは、そのような危険を熟知していた作家であり、自作を世に出し、後世に残すために、なみなみならぬ努力を払っていたが、全ての作家がこのような活動を展開できるとは限らない。文学作品が価値あるものとして認められ、後世に伝え続けられるための法則や基準はないが、その華々しい商業的成功とは裏腹に、今日では忘れ去られ、あるいは過去に一時的に流行した作品としてしか語られてこなかった作品もある。こういった作品をもう一度読み返し、その真価を判断し続けることは、決して無駄な作業とは言えないだろう。

（みやがわ　あきこ、広島大学大学院文学研究科教授）

Succès de librairie et succès littéraire:
À propos des publications de *L'Assommoir* (1876-1877) de Zola

Akiko MIYAGAWA

[mots-clés : *L'Assommoir,* Émile Zola, roman-feuilleton, édition]

L'Assommoir, publié en feuilleton dans *Le Bien public* en 1876, a d'emblée provoqué un scandale: pornographique d'après la droite, dévalorisant le peuple selon la gauche. Toutefois, ce scandale amène le succès de librairie, largement attesté par les chiffres : trente-huit éditions en un an, soit cent mille exemplaires vendus en cinq ans.

Ces chiffres auraient pu cependant paraître suspects aux connaisseurs des pratiques éditoriales : manipulations du nombre d'éditions et d'exemplaires pour donner au public l'image d'un livre à succès de nombreuses fois réimprimé. L'examen minutieux des chiffres concernant la vente de *L'Assommoir* ne permet pas de confirmer ce genre de pratique, mais de tels chiffres auraient risqué de classer le roman dans la catégorie du roman populaire, souvent synonyme d'édition à bon marché et de gros tirage, et empêché de l'apprécier en tant qu'œuvre littéraire authentique.

En effet, conscient de ces risques, Zola lui-même prend soin de rehausser la valeur littéraire de son roman. Critique littéraire, il essaie de distinguer ses propres romans des romans populaires de l'époque, de dénier au feuilleton le mode de publication qui convient à une œuvre proprement littéraire. De plus, il procède à des retouches de ses romans parus en feuilleton au moment de leur publication en volume et les envoie à ses amis littéraires.

C'est ainsi que Mallarmé, enthousiasmé par la nouveauté, l'étude de mœurs et « l'admirable tentative de linguistique » de *L'Assommoir* fait part de son appréciation à Zola dans une lettre datée du 3 février 1877 et que l'on citera souvent comme preuve de la qualité littéraire de ce roman.